2023年7月8日
中山間地域フォーラム2023シンポジウム

中山間地域の現代的価値を考える
:ローカルな知恵に学びながら

生源寺眞一
日本農業研究所

お話の構成

１）調査・研究を振り返る

２）農業・農村の共同行動は文化資産

３）農村空間の特質を活かす

調査・研究を振り返る

中山間地域との交流

- 農学部の卒業論文は『過疎：和歌山県本宮町の場合』。研究室の荏開津先生の指導のもとで1975年に本宮町の農家・林家などの現地調査を実施。
- 1976年からは農林省農事試験場研究員。試験場の守備範囲の関東・東山・東海地域に加えて、北海道天塩町・美瑛町、宮崎県えびの市などの現地調査にも参加。当時の農林漁業金融公庫の過疎資金について、融資効果の把握と課題の摘出がテーマ。

中山間地域との交流（続き）

- 1981年から北海道農業試験場研究員。主な調査対象地は空知の水田地帯だったが、道東の中標津町の酪農家に3週間滞在し、梱包牧草の運搬や朝夕の搾乳作業に従事したことも。
- その後も全国の中山間地域に足を運ぶとともに、1987年に大学教員となって以降は、研究室の学生とともに農村を訪ねる機会も増加。20年前から長野県飯山市の「蛍の宿を守る会」の田植や稲刈の作業に参加。

2015年10月17日　蛍の宿を守る会（長野県飯山市）

農業用水とのつながりも

- 農事試験場では農業用水の調査にもエネルギーを注ぐことに。群馬県のある農業用水について、田植時に全圃場の水利用の実態調査を行ったさいには現場の責任者として作業。16日間に延べ100名の研究者が1334枚の水田のヒアリングを実施。
- 北海道農業試験場時代にも水田地帯で農業用水の利用方式を学ぶとともに、深川地区の大正用水など、水利開発と開田の歴史に接する機会も。

農業用水とのつながりも（続き）

- 出身地の愛知県の農業用水ともさまざまな交流。特に矢作川右岸の村高用水の水利組織の活動日誌を詳細に解釈・分析した作業については、地元のリーダー諸氏による証言とともに、40年後の現在も鮮明に記憶。
- 愛知用水の経済効果を把握する調査研究にも参加。2011年秋には水源の長野県大滝村で開催された50周年記念イベントに参上。工業用水・農業用水のみならず、生活用水への貢献も印象的。

海外の現地から学ぶ

- 1990年4月から英国に1年滞在したことを契機に西欧の農業の現場、とくに英仏の条件不利地域を繰り返し訪問することに。オランダやデンマークなどの平坦地農業との比較分析も得難い経験。
- 並行して合衆国とカナダ、豪州とニュージーランドも現地調査の対象に。こうした新開国の農業や資源利用の実態に触れることで、日本やモンスーンアジア、さらには西欧の農業・農村の特質をめぐる認識が深まった面も。

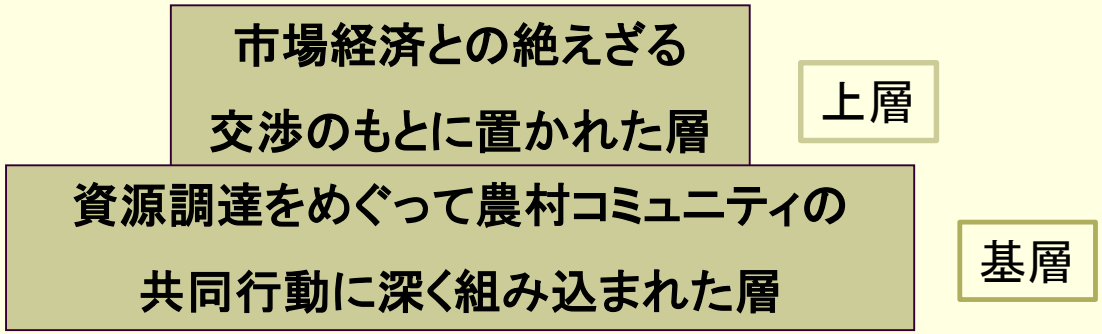
内外の環境変化に向き合う

- お話の柱は第1にローカルコモンズの意義であり、第2に中山間地域の価値の再評価。いずれも過去のフォーラムのシンポでも言及。あえて再論するのは、内外の環境変化のもとで、二つの柱の重要性と現実味が着実に高まっているとの判断から。
- ロシアの軍事侵攻によって激変した国際環境は、人間が蓄積してきたローカルな知恵の大切さを浮き彫りに。国内では成長一本鎗の時代の終焉とともに、多様な価値観が共存できる社会へと移行。新時代の日本らしさの探求も中山間地域の課題。

農業・農村の共同行動は文化資産

日本の農業は二階建て

- 日本の農業、とくに水田農業は二階建て。市場経済との絶えざる交渉のもとに置かれたビジネスの上層と、地域の農業インフラを支えるコミュニティの共同行動のもとで機能してきた基層。



農業・農村には日本のコモンズ

- 基層の共同行動の典型は農業用水路の維持管理活動や公平な用水配分のためのルールの発動。農道や公民館の維持管理も共同の力によるところ大。共助・共存の仕組みには、多くの都会で失われた日本の文化的資産としての側面も。
- 農業用水に典型的な地域の共有資源の利用システムは日本型のコモンズ。時代の推移とともにかたちを変えながら、世代を超えて長期にわたって継承されることに。

「コモンズの悲劇」の警鐘

- 1968年の『サイエンス』に掲載された論文「コモンズの悲劇」において、G.ハーディンは地球社会全体をコモンズと見立てて、メンバーである人類の合理的で利己的な行動によって自壊するとの警鐘を発信。
- 資源利用をめぐって利益が拡散したり、損失が拡散する状況下にあっては、孤立した個人や事業者や国が合理的な利己心の追求に徹するならば、結果的に得られるところは小さく、ときには破滅的な事態に。

【参考】コモンズの悲劇の構図

- １００人の牛飼いが共有地で各自1頭を放牧。
- 草資源はギリギリまで利用されていて、1頭の増頭は１０万円の利益をもたらす反面、草資源の損失は５０万円に達する状態にある。むろん、増頭は避けたほうが賢明。
- それでも合理的な利己心に忠実であるとき、牛飼いは増頭を選ぶであろう。なぜならば、50万円の損失のうち自分自身が被る損失は

  50万円÷101頭×２頭＝約１万円

  にとどまるから。手元に10万円－1万円残る皮算用。
- 皆が同じように考えることで、さらに他人の増頭を見越してわれ先に増頭に向かうことで、共有地は無残に崩壊。

【参考】コモンズの悲劇とゲームの理論

コモンズの悲劇（囚人のジレンマ）

		牛飼いBの選択	
		頭数維持	増頭する
牛飼いAの選択	頭数維持	6， 6	−4， 9
	増頭する	9， −4	−2， −2

注）左側が牛飼いA の利益（損失）、
右側が牛飼いBの利益（損失）。

悲劇を克服してきた人間の知恵

- さまざまな地域資源の維持管理と利活用にはコミュニティのルールが存在。現実のコモンズが時空を超えて継承されてきた歴史的事実について、ゲーム理論を援用しながら検証したE.オストロム。2009年にはノーベル経済学賞を受賞。
- 経験の蓄積や広い視野の獲得によって、ウィン・ウィンの可能性を掴み、ウィン・ウィンのための協調行動を生み出した人間の知恵（協力ゲーム）。抜け駆けを防止するためのルールが工夫されている点にも、持続的なコモンズの特徴。

過去のものではないハーディンの警鐘

- 現実のコモンズが長期にわたって継承されてきたことを踏まえて、ハーディンは20年後の論考において「論文のタイトルは『管理されざるコモンズの悲劇』とすべきであった」と述懐。
- 「管理されざるコモンズの悲劇」は今日でもリアルな警鐘。国際環境の動向を直視するならば、人間社会の根底に蓄積された知恵を再確認する必要性が急上昇。ローカルなコモンズの経験をグローバルに活かす構想も現代の課題。

決まりごとが通用しない

- 農村の共同行動の特徴には、メンバーが同質的で閉鎖型だった点も。メンバーが多様化し、域外で育った若者の就農が当たり前になる中で、互いに納得して参加する共同行動へ。歴史を振り返ると、決まりごとが通用しなくなったとき、自分たち自身で新たな決まりごとを生み出してきた農村コミュニティ。
- 多くは江戸時代までに形成された日本の集落。農業の機械化が進み、輸送手段・情報通信手段が格段に発達した今日、従来の集落を共同行動の基礎単位とすること自体が再考の対象に。

【参考】職業として選ばれる農業

- 2021年の40歳未満の新規就農者1万2750人のうち、52%が農業法人などで就農した新規雇用就農者であり、12%は農地や資金を調達して農業を始めた起業型の新規参入者。大半は非農家出身。
- 家族経営の継承においても着実に進む変化。農業は長男が継ぐという通念は過去のもの。珍しくなくなった長男以外が就農するケース。現代の農業には職業として選ばれる産業としての側面が強まることに。

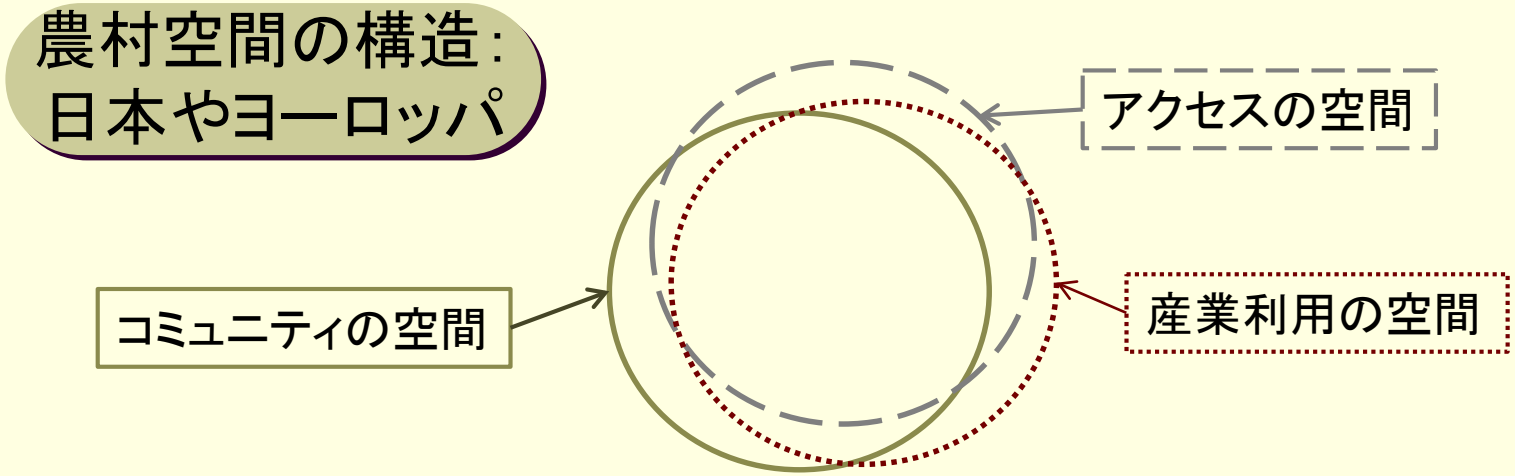
農村空間の特色を活かす

隣り合わせの都会と農村

- 農耕景観や伝統文化の継承など、農業の多面的機能が日本やヨーロッパで高い関心を呼んでいる背景には、地域に多くの非農家住民を擁し、地域外から多くの訪問者を受け入れる農村空間の構造。多面的機能の価値もその受益者があればこそ。
- 学びの機会としての農業生産の現場。身近な水利施設と接することで、歴史的に継承されてきた地域の共有資源の大切さを確認。もっと強調されてよい農業用水などの教材としての価値。

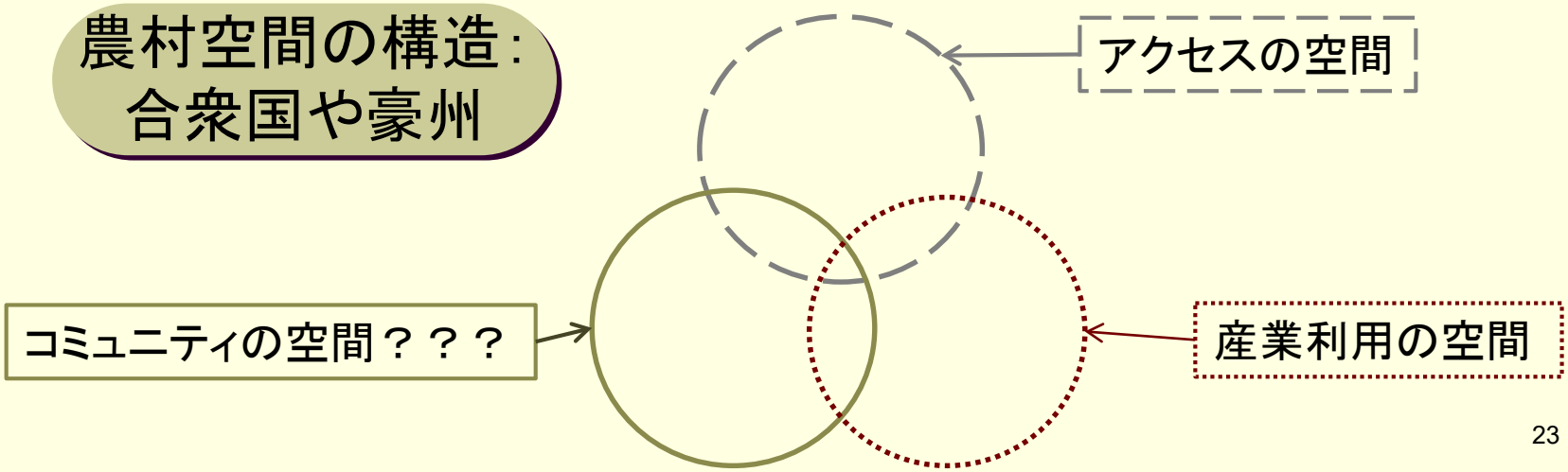
農村空間の構造には日欧に共通点

　農村の存立構造という点で、日本とヨーロッパの国々には共通項。自然の産業的利用の空間、非農家住民も含んだコミュニティを支える居住環境としての空間、さらには外部からもアクセス可能で人々がエンジョイできる自然空間が重なり合う構造。



合衆国や豪州では？

　合衆国の中西部や豪州のような開発の歴史の浅い地域では、自然資源がなお豊富なこともあって、自然の産業的利用の空間である農場と、人々のアクセスの対象としての自然空間（典型的には国立公園）は概して分離されて立地。日常的な交流の場も、農場からは距離のある小さな町にあるのが普通。



金銭に換算できない価値

- 農業の多面的機能について、1998年の時点で農林水産省は6兆9千億円の価値があるとの試算を公表。当時の農業粗生産額は10兆円弱。多面的機能も文化の伝承あたりになると経済的価値の計算には不向き。そもそも金銭に換算されなければ価値が分からないとすれば、それも情けない話。
- 抽象的な概念や経済価値としての理解ではなく、具体的な歴史との出会いや地域ならではの個性への共感こそが大切。

【参考】農業と森林の多面的機能

- 「国土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等農村で農業生産活動が行われることにより生ずる食料その他の農産物の供給の機能以外の多面にわたる機能」が農業の多面的機能（食料・農業・農村基本法第3条）。
- 森林・林業基本法では「国土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、公衆の保健、地球温暖化の防止、林産物の供給等の多面にわたる機能」を「森林の有する多面的機能」と定義（第2条）。

奥行きのある多面的機能

中山間地域の多面的機能には奥行きがある。山林や河川といった周囲の環境と広く接していること、用水路などの構造物についても自然の土台がはっきり分かること、災害への備えといった面で自然との緊張関係のレベルが高いことを強調しておこう。人為の加わった自然を、しばしば原生自然との対比で二次的自然と呼ぶが、中山間地域には人間社会の影響の比較的小さな二次的自然が保全されている。そこには希少性の高い動植物も生きている。豊かな自然環境とも関わって、山間部ならではの食材や調理法が各地で伝承されていることも見逃せない。

拙著『農業と人間』より

中山間地域のプラスの価値

農村らしい農村と言ってよい中山間地域だが、日本社会の長期的な推移のもとで、その評価にも変化が現れている。1990年代に入って中山間という用語が使用されるまでは、過疎地域との表現が一般的だった。国の経済成長に追随することが難しく、都市部への人口流出が続いて自治体の財政も困難に直面している。単純化すれば、こんな評価だった。農業についても、ヨーロッパの政策の影響下で条件不利地域と表現されることもあった。これもネガティブな評価というわけだが、近年は中山間地域のプラスの価値を見直す動きが広がっている。ハンディキャップを直視しつつも、深みのある自然資源と最先端のデジタル技術の活用などを通じて、逆転の強みが模索されている。そして何よりも、人と人がつながる共同の価値を実感できる空間、それが中山間地域であることが再認識されはじめた。

『町村週報』2022年4月の拙稿より

時代の変化で再チャレンジも

- 成長一本鎗の路線から脱却し、さまざまな個性と多様な価値観の人々が共存する社会に移行する中で、日本らしさの継承と創造が問われる時代に。
- かつては挫折した取り組みに再チャレンジの可能性も。産業空間・居住空間・アクセス空間の重層構造のもとでのゾーニングの難しさ。高度成長期に生まれた制度（都計法・農振法）は、未曽有の開発圧力のもとで各地にスプロール現象を生むなど、十分には機能せず。社会環境が大きく変わる中で、改めて制度を工夫することも重要な課題。

農業に接することの意味

- 農業の副産物としての多面的機能が強調されてきたが、農業自体の価値を再認識することも大切。人間の思い通りにならない生き物を相手にする農業の難しさ・面白さ・達成感。みずから育ちゆくものを育てる点で、教育にも通じるのが農業の本質。
- 極度に便利で効率的な現代社会に住み慣れたことで、私たち人間の生き物としての能力に劣化が生じている面も。食料を何の苦労もなく手にできる現代人には、高度な集中治療室に横たわった患者に似た面も。

ご清聴ありがとうございました。